



# Red Hat Subscription Management 2023

## Red Hat Subscription Management の使用

Red Hat サブスクリプション、エンタイトルメント、およびエラータの管理



# Red Hat Subscription Management 2023 Red Hat Subscription Management の使用

---

Red Hat サブスクリプション、エンタイトルメント、およびエラータの管理

## 法律上の通知

Copyright © 2023 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

Red Hat Subscription Management ツールおよびアプリケーションでは、システムレベルと組織レベルの通知およびステータスを確認し、サブスクリプションのニーズの変更に対応するさまざまな方法を提供しています。このガイドでは、さまざまなレポートおよび通知メカニズムと、不十分なサブスクリプションや期限切れのサブスクリプションを修正するための簡単な方法について詳しく説明します。

---

## 目次

第1章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGEMENT について .....	3
第2章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER を使用したサブスクリプションの表示 .....	4
第3章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER でのシステムの目的の使用 .....	6
3.1. システム目的属性に使用できる値の一覧表示	6
3.2. システム目的属性のカスタム値の設定	7
第4章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGEMENT による SIMPLE CONTENT ACCESS の有効化 .....	9
4.1. RED HAT SATELLITE サーバーを使用しない SIMPLE CONTENT ACCESS の有効化	9
第5章 接続されていない SATELLITE SERVER のマニフェストの使用 .....	10
5.1. 接続されていない SATELLITE SERVER の新しいサブスクリプション割り当ての作成	10
5.2. 接続されていない SATELLITE SERVER のサブスクリプション割り当てへのサブスクリプションの追加	10
5.3. 接続されていない SATELLITE SERVER のマニフェストのダウンロード	11
第6章 エラータについて .....	12
6.1. エラータ通知設定の管理	12
6.2. エラータの適用に関するトラブルシューティング	12
第7章 モジュールストリームの使用 .....	14
7.1. モジュールプロファイルのインストール	14
7.2. モジュールストリームの有効化	14



## 第1章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGEMENT について

Red Hat 製品は GNU Public License で利用できますが、Red Hat ではサブスクリプションベースのライセンスを通じて Red Hat 製品をサポートしています。サポートには以下が含まれます。

- ダウンロード可能なコンテンツおよび更新
- ナレッジベースへのアクセス
- 製品のサポート

通常、サブスクリプションの管理タスクは [Red Hat Hybrid Cloud Console](#) で行いますが、環境によっては、カスタマーポータルを介してタスクを行う必要があります。Red Hat は、アカウント全体のデプロイ済みソフトウェア製品およびサブスクリプションを、組織全体で確認できる方法を提供しています。

Red Hat Subscription Management は、管理者に以下の情報を提供します。

- 組織で利用可能な製品
- システムにインストールされている製品
- サブスクリプションのステータス

Red Hat Subscription Management を使用すると、管理者は、次の 2 つの異なる視点から、システムとシステムで使用しているサブスクリプションの関係を特定できます。

- アカウントおよびシステムが使用しているアクティブなサブスクリプションすべて
- インベントリー内のプロファイル対象のすべてのシステムと、それらが使用しているサブスクリプション

Red Hat Subscription Management は、以下を含むオンプレミスツールのタスクの多くを実行できます。

- システムの登録
- サブスクリプションのアクティブ化と更新
- システムファクト、契約情報、UUID の取得

### 関連情報

- RHEL システムを登録する方法は、[RHEL システム登録のスタートガイド](#) を参照してください。Hybrid Cloud Console でホストされるサービスのユーザーロールの管理については、[ロールベースアクセス制御 \(RBAC\) のユーザーアクセス設定ガイド](#) を参照してください。

## 第2章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER を使用したサブスクリプションの表示

サブスクリプションを管理するには、管理者は次の情報を知っている必要があります。

- システムで利用可能なサブスクリプション
- システムで使用されているサブスクリプション

サブスクリプションは次の方法で表示できます。

- コマンドラインインターフェイス (CLI) から **subscription-manager** コマンドを使用
- Hybrid Cloud Console の [Subscription Inventory](#) ページ

次の表に、**subscription-manager** コマンドでサブスクリプションを管理するのに使用できるオプションを示します。

表2.1 subscription-manager list オプション

コマンド	説明
--installed (または何も指定しなかった場合)	システムにインストールされているすべての製品をリストします。'list' でオプションを指定しなかった場合、'--installed' 引数を使用した場合と同じになります。
--consumed	システムに関連付けられているすべてのサブスクリプションをリストします。
--available[-all]	'available' だけを使用すると、システムと互換性のあるアクティブなサブスクリプションがすべてリストされます。'--available --all' を使用すると、システムとの互換性がないものも含め、すべてのサブスクリプションがリストされます。
--ondate=YYYY-MM-DD	指定日にアクティブで、利用できるサブスクリプションを表示します。これは、必ず '--available' オプションと一緒に使用します。これを使用しないと、コマンドは現在の日付を使用します。
--installed	システムにインストールされているすべての製品 (サブスクリプションの有無) と、システムに関連付けられている製品サブスクリプション (およびそれらの製品がインストールされているかどうか) をすべてリストします。

### 使用中のサブスクリプションを表示する 'list' の例

```
[root@server1 ~]# subscription-manager list --consumed
```

```
+-----+
```



## Consumed Product Subscriptions

+-----+

```
ProductName:   Red Hat Enterprise Linux Server
ContractNumber: 1458961
SerialNumber:  171286550006020205
Active:        True
Begins:        2009-01-01
Expires:       2011-12-31
```

## 利用可能なすべてのサブスクリプションを表示する 'list' の例

```
[root@server1 ~]# subscription-manager list --available --all
```

+-----+

## Available Subscriptions

+-----+

```
ProductName:   RHEL for Physical Servers
ProductId:    MKT-rhel-server
PoolId:       ff8080812bc382e3012bc3845ca000cb
Quantity:     10
Expires:      2011-09-20
```

```
ProductName:   RHEL Workstation
ProductId:     MKT-rhel-workstation-mkt
PoolId:       5e09a31f95885cc4
Quantity:     10
Expires:      2011-09-20
```

## 関連情報

- Hybrid Cloud Console GUI を使用してサブスクリプションインベントリを表示する方法については、[Hybrid Cloud Console でのサブスクリプションインベントリの表示と管理](#) を参照してください。

## 第3章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER でのシステムの目的の使用

システムの目的は、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) システムの使用目的を記録するために使用します。システムの目的を設定すると、ロール、サービスレベルアグリーメント、用途などのシステム属性を指定できます。デフォルトでは、各システム目的属性で次の値を使用できます。

### ロール

- Red Hat Enterprise Linux Server
- Red Hat Enterprise Linux Workstation
- Red Hat Enterprise Linux Compute Node

### サービスレベルアグリーメント

- Premium
- Standard
- Self-Support

### 用途

- 実稼働
- 開発/テスト
- 障害復旧

システムの目的を設定すると、次のような利点があります。

- システム管理および事業運営に関する詳細なシステムレベルの情報
- システムを調達した理由とその目的を判断する際のオーバーヘッドを削減

システムの目的のデータは、次のいずれかの方法で設定できます。

- アクティベーションキーの作成時
- イメージの作成時
- Connect to Red Hat 画面を使用してシステムを登録する際の GUI インストール時
- syspurpose キックスタートコマンドを使用したキックスタートインストール時
- subscription-manager コマンドライン (CLI) ツールを使用したインストール後

### 関連情報

- アクティベーションキーを使用してシステムの目的を設定するには、[アクティベーションキーの作成](#) を参照してください。

## 3.1. システム目的属性に使用できる値の一覧表示

root ユーザーとして、**--list** オプションを指定して **subscription-manager syspurpose** コマンドおよびサブコマンド (**role**、**usage**、**service-level**、または **addons**) を入力すると、すべてのシステム目的属性で利用可能な値を一覧表示できます。システム目的属性で使用可能な値を一覧表示するには、登録済みのシステムでコマンドを入力するか、未登録のシステムで認証オプションを指定してコマンドを入力する必要があります。次の例は、登録済みのシステムと未登録のシステムで、ロール属性で利用可能なシステム目的の値を一覧表示する方法を示しています。

システムが登録されている場合は、以下のコマンドを入力します。

```
[root@localhost ~]# subscription-manager syspurpose role --list
```

システムが登録されていない場合は、必要に応じて **--username**、**--password**、**--org**、および **--token** 認証オプションを指定して以下のコマンドを入力します。

```
[root@localhost ~]# subscription-manager syspurpose role --list --username=<username> --password=<password> --org=<organization_ID> --token=<token>
```

ここで、**--username** オプションは、Red Hat アカウントの組織管理者権限を持つユーザー名を指定します。**--password** オプションは、関連するパスワードを指定します。**--org** オプションは、組織 ID 番号を指定します。**--token** オプションは、virt-who サービスアカウントのトークンを指定します。



#### 注記

組織 ID の指定は、複数の組織があり、特定の組織を指定する必要がある場合にのみ必要となります。



#### 注記

トークンの指定は、virt-who が OpenShift Virtualization に接続するように設定されている場合にのみ必要です。

登録済みのシステムでコマンドを入力するか、未登録のシステムで認証オプションを指定してコマンドを入力すると、ロール属性で利用可能な値のリストが次のように出力されるはずです。

```
+-----+
| Available role |
+-----+
- Red Hat Enterprise Linux Workstation
- Red Hat Enterprise Linux Server
- Red Hat Enterprise Linux Compute Node
```

システムの目的のアドオンは組織に固有のもので、利用可能な値の一覧には表示されません。登録済みのシステム、または認証オプションを指定した未登録のシステムで、**--list** オプションを使用して利用可能なシステムの目的のアドオンをリストしようとする、subscription-manager によって警告メッセージが表示されます。以下に例を示します。

```
# subscription-manager syspurpose addons --list
There are no available values for the system purpose "addons" from the available subscriptions in this organization.
```

## 3.2. システム目的属性のカスタム値の設定

設定する値がアカウントの有効な値のリストに含まれていない場合は、**--set** オプションを使用してカスタムのシステム目的の値を入力できます。カスタム値を設定するには、登録済みのシステムでコマンドを入力するか、未登録のシステムで認証オプションを指定してコマンドを入力する必要があります。

次の例は、登録済みのシステムと未登録のシステムのシステム目的ロール属性にカスタム値 "foo" を設定する方法を示しています。

システムが登録されている場合は、以下のコマンドを入力します。

```
[root@localhost ~]# subscription-manager syspurpose role --set="foo"
```

システムが登録されていない場合は、必要に応じて **--username**、**--password**、**--org**、および **--token** 認証オプションを指定して以下のコマンドを入力します。

```
[root@localhost ~]# subscription-manager syspurpose role --set="foo" --username=<username> --password=<password> --org=<organization_ID> --token=<token>
```

ここで、**--username** オプションは、Red Hat アカウントの組織管理者権限を持つユーザー名を指定します。**--password** オプションは、関連するパスワードを指定します。**--org** オプションは、組織 ID 番号を指定します。**--token** オプションは、virt-who サービスアカウントのトークンを指定します。



#### 注記

組織 ID の指定は、複数の組織があり、特定の組織を指定する必要がある場合にのみ必要となります。



#### 注記

トークンの指定は、virt-who が OpenShift Virtualization に接続するように設定されている場合にのみ必要です。

登録済みシステムまたは認証オプションを指定した未登録システムでカスタム値を設定すると、カスタム値が無効であると見なされるため、出力に警告メッセージが表示されることが予想されます。ただし、警告が表示されても、subscription-manager によってカスタム値が設定されるため、出力には確認メッセージも表示されます。

```
Warning: Provided value "foo" is not included in the list of valid values
- Red Hat Enterprise Linux Workstation
- Red Hat Enterprise Linux Server
- Red Hat Enterprise Linux Compute Node
role set to "foo".
```



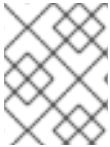
#### 重要

subscription-manager は、システムが登録済みの場合、または未登録のシステムで認証情報を入力した場合にのみ警告メッセージを表示します。システムが未登録で、認証オプションを指定しなかった場合、subscription-manager は警告メッセージを表示せずにカスタム値を設定します。

## 第4章 RED HAT SUBSCRIPTION MANAGEMENT による SIMPLE CONTENT ACCESS の有効化

Red Hat Satellite Server を使用する場合は、以下の方法で Simple Content Access を有効にできます。

- Red Hat Hybrid Cloud Console の [Manifests](#) ページのサブスクリプションマニフェスト。
- Satellite 組織 (Satellite グラフィカルユーザーインターフェイスを使用)。



### 注記

Satellite 組織の Simple Content Access 設定は、マニフェストの設定よりも優先されません。

Satellite Server を使用しない場合は、Red Hat カスタマーポータルから Simple Content Access を有効にすることができます。

Simple Content Access を有効にしたら、アクティベーションキー、ホストグループ、およびホスト設定に関連する有効化後の手順を追加で実行します。

### 4.1. RED HAT SATETLLITE サーバーを使用しない SIMPLE CONTENT ACCESS の有効化

Simple Content Access を有効にすると、コンテンツアクセスモードが変更されます。コンテンツにアクセスするための前提条件として、システムにサブスクリプションを割り当てる必要がある従来のモードの使用を停止します。割り当てられたサブスクリプションの存在に関係なく、コンテンツを消費できる新しいモードの使用を開始します。

#### 前提条件

- 組織の組織管理者のロール

#### 手順

Satellite Server を使用せずに Red Hat Subscription Management で直接接続されたシステムの Simple Content Access を有効にするには、以下の手順を実行します。

1. Red Hat カスタマーポータルにログインします。
2. **Overview** ページで、**Simple content access for Red Hat**スイッチを **Enabled** に設定します。

この手順を完了すると、現在および新しく登録されるすべてのシステムで Simple Content Access が有効になります。現在のシステムは、次回サブスクリプション管理サービスにチェックインするときに、必要な Simple Content Access 認証情報をダウンロードします。

#### 関連情報

- Satellite がサポートするシステムで Simple Content Access を有効にする方法は、[Red Hat Hybrid Cloud Console からの Simple Content Access モードの設定](#) を参照してください。

## 第5章 接続されていない SATELLITE SERVER のマニフェストの使用

カスタマーポータルからサブスクリプションマニフェストを作成および管理するのは、接続されていない Satellite Server を使用しているユーザーのみです。

接続されている Satellite Server を使用しているユーザーは、Red Hat Hybrid Cloud Console の [Manifests](#) セクションでサブスクリプションマニフェストを作成および管理します。接続されている Satellite Server のサブスクリプションマニフェストの作成および管理については、[接続されている Satellite Server のマニフェストの作成および管理](#) を参照してください。

### 5.1. 接続されていない SATELLITE SERVER の新しいサブスクリプション割り当ての作成

接続されている Satellite Server を使用しているユーザーは、Red Hat Hybrid Cloud Console の [Manifests](#) セクションでサブスクリプションマニフェストを作成します。接続されている Satellite Server のマニフェストを作成する方法については、[接続されている Satellite Server のマニフェストの作成](#) を参照してください。

接続されていない Satellite Server を使用しているユーザーは、新しいサブスクリプション割り当てを作成して、オフラインまたはエアギャップ状態のシステムのサブスクリプションとエンタイトルメントを確保することができます。この手順は、マニフェストをダウンロードしてシステムにアップロードする前に行う必要があります。

#### 手順

接続されていない、またはエアギャップ状態の Satellite Server のマニフェストを作成するには、次の手順を実行します。

1. [Subscription Allocations](#) ページから **Create Manifest** をクリックします。
2. **New Subscription Allocation** をクリックします。
3. 割り当ての **Name** を入力し、後で検索できるようにします。
4. システムで使用する予定のサブスクリプション管理アプリケーションの **Type** を選択します。
5. **Create** をクリックします。

### 5.2. 接続されていない SATELLITE SERVER のサブスクリプション割り当てへのサブスクリプションの追加

サブスクリプション割り当てにサブスクリプションを追加する必要があるのは、接続されていない Satellite Server を使用しているユーザーのみです。非接続ユーザーの場合は、マニフェストをダウンロードしてホストシステムに追加する前に、この手順を完了する必要があります。

接続されている Satellite Server を使用しているユーザーは、この手順をスキップしてください。接続されている Satellite Server のサブスクリプションマニフェストの管理については、[接続されている Satellite Server のマニフェストの作成および管理](#) を参照してください。

#### 手順

接続されていない Satellite Server のサブスクリプション割り当てにサブスクリプションを追加するには、次の手順を実行します。

1. [Subscription Allocations](#) ページから、サブスクリプションを追加する割り当てをクリックします。
2. **Subscriptions** タブをクリックします。
3. **Add Subscriptions** をクリックします。
4. 追加する予定の各サブスクリプションのエンタイトルメント数を入力します。使用しているシステムに正しいエンタイトルメント数を追加するようにしてください。
5. **Submit** をクリックします。



#### 注記

- 割り当てには、将来の日付のサブスクリプション、または開始日が将来の日付であるサブスクリプションを含めることができます。

### 5.3. 接続されていない SATELLITE SERVER のマニフェストのダウンロード

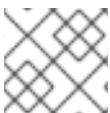
カスタマーポータルからサブスクリプションマニフェストをダウンロードするのは、接続されていない Satellite Server を使用しているユーザーのみです。

接続されていない Satellite Server を使用しているユーザーは、Red Hat Hybrid Cloud Console の [Manifests](#) セクションにサブスクリプションマニフェストをダウンロードします。接続されている Satellite Server のマニフェストをエクスポートおよびダウンロードする方法については、[オンライン接続されている Satellite Server 向けのマニフェストのエクスポートおよびダウンロード](#) を参照してください。

#### 手順

接続されていない Satellite Server のサブスクリプションマニフェストをダウンロードするには、次の手順を実行します。

1. [Subscription Allocations](#) ページから、サブスクリプションを追加する割り当てをクリックします。
2. **Subscriptions** タブをクリックします。
3. **Export Manifest** をクリックします。



#### 注記

ファイルはデフォルトのダウンロードフォルダーに保存されます。

マニフェストをダウンロードしたら、Satellite Server にインポートできます。次に、Satellite Web UI を使用してマニフェストを更新し、リフレッシュして変更を反映します。または、変更を含む更新済みのマニフェストをインポートできます。詳細は、Red Hat Satellite の「コンテンツ管理ガイド」の [Satellite Server へのサブスクリプションマニフェストのインポート](#) を参照してください。

## 第6章 エラータについて

サブスクリプション管理の一環として、ソフトウェアの更新および新しいリリースの追跡があります。バグ修正から新しいリリースまで、更新が利用可能になるたびに、通知メールを送信できます。通知は、その製品のサブスクリプションが関連付けられている登録済みシステムに対してのみ送信されます。

### 6.1. エラータ通知設定の管理

エラータ通知は、個別のシステムではなく、ユーザーアカウントの基本設定として設定されます。Red Hat Subscription Management が、エラータの最新情報があるかどうかを確認する場合には、特定のシステムではなく、インベントリ全体を確認します。登録されているシステムに影響を及ぼす場合は、エラータ通知が送信されます。ただし、電子メールには実際に影響を受けるシステムが記載されません。

#### 手順

1. [Overview](#) ページから、アカウント名をクリックします。
2. [Account Settings](#) をクリックします。
3. [Errata Notifications](#) をクリックします。
4. 受信するエラータの種類を選択します。セキュリティエラータは、重大なセキュリティ問題に関連しています。バグ修正および拡張機能の通知は、製品への増分更新に関連していません。
5. 通知の頻度を選択します。
6. [Save](#) をクリックします。

### 6.2. エラータの適用に関するトラブルシューティング

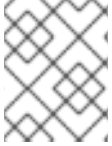
Red Hat Subscription Management に該当するエラータが表示されているにもかかわらず、利用可能な yum 更新がない場合は、いずれかの設定が正しくないことを意味している可能性があります。

#### 手順

1. そのシステム上で、利用可能なすべての更新をインストールする適切なパーミッションがあることを確認します。必要なパーミッションがない場合は、組織の管理者にお問い合わせください。
2. RHEL 5 または RHEL 6.4 以前のバージョンを実行している場合は、最新のエラータおよびシステム更新を適用できるように、[システムのアップグレード](#) をご検討ください。
3. チェックインを強制し、yum update を再度実行します。\* システムが最近チェックインされていない場合、カスタマーポータルに表示される内容と実際にシステムにインストールされている内容に差異が見られる場合があります。

```
# rm -f /var/lib/rhsm/packages/packages.json
# service rhsmcertd stop
# rhsmcertd --now
# yum update
```





### 注記

もう一度システムを強制的にチェックインした後に、Red Hat Subscription Management でエラータのデータが正しいデータに更新されるまで、最大 4 時間お待ち下さい。

## 第7章 モジュールストリームの使用

モジュールはパッケージの編成メカニズムです。使用すると、ユーザーが複数のバージョンのパッケージセットから選択できるようになります。モジュールは、グループとリポジトリの機能を併せ持っています。たとえば、あるネットワークにおいて、一部のシステムでは最新バージョンのソフトウェアで頻繁に更新し、その他のシステムではバージョンの一貫性を維持することができます。

Anaconda インストーラーは、モジュールストリームを有効にし、モジュールプロファイルをインストールできます。

### 7.1. モジュールプロファイルのインストール

モジュールプロファイルをインストールして、モジュールとストリームの組み合わせを有効にし、一度に複数のパッケージをインストールします。`%packages` セクションのパッケージの代わりに `@module:stream/profile` 構文を使用します。

- モジュールにデフォルトのストリームが指定されている場合は、削除できます。デフォルトのストリームが指定されていない場合は、指定する必要があります。
- モジュールストリームにデフォルトのプロファイルが指定されている場合は、削除できます。デフォルトのプロファイルが指定されていない場合は、指定する必要があります。
- 異なるストリームでモジュールを複数回インストールすることはできません。
- 同じモジュールおよびストリームの複数のプロファイルをインストールすることはできません。

When a module and a package group exist with the same name, the module takes precedence.

The following values are possible in the `_%packages_` section after introduction of modules:

```
----
%packages
```

```
@^an_environment @a_group @module_with_default_stream
@module_without_default_stream:stream_name @some_module:some_stream_name/profile_1
@some_module:some_stream_name/profile_2 a_package
```

#### 7.1.1. %end

Red Hat Enterprise Linux 8 では、モジュールは Application Stream リポジトリにのみ存在します。利用可能なモジュールの一覧を表示するには、インストールされている Red Hat Enterprise Linux 8 システムで `yum module list` コマンドを使用します。

### 7.2. モジュールストリームの有効化

コマンドを使用して、モジュールおよびストリームを有効にすることもできます。

#### 手順

キックスタートスクリプトでパッケージモジュールストリームを有効にするには、`module` コマンドを使用します。

```
module --name=NAME [--stream=STREAM]
```

コマンドでは、以下ようになります。

- `--name=` 有効にするモジュールの名前を指定します。NAME は、実際の名前に置き換えます。
- `--stream=` 有効にするモジュールストリームの名前を指定します。STREAM は、実際の名前に置き換えます。

## 関連情報

[Red Hat Enterprise Linux 8 AppStream の使用](#)